

「連覇」が持つ意味

# 「現在地」が見えた春

写真 小倉直樹

## 山梨学院

「山梨」



やまなしがくいん

今春のセンバツ、春夏16回目の甲子園で、初の頂点に立った。同校初の1大会2勝を挙げると、6試合を勝ち上がった。山梨県勢初の快挙。夏に向けては、さらなる上積みを目指している。

### 「運」「実力」「勢い」

今春のセンバツで県勢として春夏を通じて初の甲子園優勝を成し遂げた山梨学院。大黒柱のエース右腕・林謙吾は全6試合に登板し、4完投でセンバツ史上初の6勝を挙げた。無尽蔵の



↑清峰（長崎）を率いて2009年春のセンバツを制した吉田監督（右）は、山梨学院では長男の部長・健人氏（左）のサポートもあり頂点に立った

スタミナで東北（宮城）との開幕試合から決勝まで696球を投げ切った。清峰（長崎）を率いて2009年春のセンバツを制した山梨学院・吉田洸二監督は史上4人目となる複数校での甲子園優勝を達成。これまで山梨学院は甲子園で1大会1勝が最高成績だったが、一気に頂点まで駆け上がった。指揮官は「まさに神風が吹いた。「優勝するよ」と甲子園の神様が言っていた」と快進撃を振り返った。県勢初の偉業に山梨県高野連関係者は「一つの壁を破ってくれた」と感謝した。その上で「山梨学院と互角の戦いができれば、他校も全国レベルの力があると自信を持つことができる」と波及効果に期待。センバツ後の県大会は期待した通りの戦いが繰り広げられた。決勝では甲府工が延長12回の激戦の末、16対15で山梨学院を撃破。降雨の悪条件下だったが、センバツでは安定感を誇った山梨学院のエース右腕・林は5回2/3を12安打10失点。全国の強豪が打ち崩せなかった右腕を攻略してみせた。県外のチームでもプロ注目目の最速150キロ右腕・早坂響を擁する幕張総合（千葉）と練習試合を行うなど「王者」として、挑戦を受けて立つ立場となっている。

市長特別賞」が授与された。夏は2季連続の甲子園優勝に期待も寄せられるが、吉田監督に慢心はない。過去に甲子園を制した指揮官は「運」「実力」「勢い」が大事と口をそろえていたと回想。「優勝した監督さんがよく言っていた意味が分かりました。（山梨学院は）優勝に必要な運と勢い。3つのうち2つがしっかりと合っていたんだな、と。勢いの大きさを感じました。地元に戻って練習試合とかで負けて（センバツでは）すべてがうまくいった振り返ったと気づかされました」と振り返った。練習試合、決勝で敗れた県大会の戦いを通じて「自分たちの現在地が見えた」と謙虚に見据えた。

### U18代表候補で深めた自信

山梨2位として関東大会に出場。横浜隼人（神奈川県）との1回戦では12対0で5回コールド勝ちし、投打に力の差を見せた。打っては一番・徳弘太陽が2ランを含む4安打3打点と打線を

←センバツ優勝投手のエース・林は、U18代表候補強化合宿に参加。関東大会1回戦（対横浜隼人）では5回参考ながらノーヒットノーランを遂げ、安定感はずばりである



けん引し、13安打。投げては林が5回参考ながら1死球のみでノーヒットノーランを達成。自己最速を2キロ更新する144.2キロをマークするなど力強さが増した。視察したNPBスカウトは「打者が合わせづらい角度とボールの見えづらさを備えている」とセンバツで防御率1.57と無双した要因を分析した。

センバツ後、林は一塁手の高橋海翔とともに高校日本代表候補強化合宿に召集。大阪桐蔭の左腕・前田悠伍ら世代を代表する投手と練習を通じて交流した。専大松戸の右腕・平野大地や享栄・東松快征ら最速150キロ超の直球を武器にする豪腕の姿に「変化球のキレはもちろんすごかったですけど、単純に真つすぐの速さが一番、違った。それでも「コントロールや、球の質とキレは負けていないかな」と思いました」と、林は己の長所に自信を深めた。

### エース依存からの脱却

センバツでは表面化しなかった課題もある。関東大会で連投となった帝京との2回戦では先発し、8回11安打8失点。チームも1点差で競り負けた。エースの出来がチームを左右することが、より明確となった。林に近い実力を持つ投手は不在で、

指揮官は「いないので、大変です」と懸念する。センバツでは最後まで好調をキープしたが、不調時は体が打者寄りにつまみ、開きが早くなることで持ち味を失ってしまふ。常に力を発揮するために投球フォームを常に微修正し続ける必要がある。本人も「試合の中で修正できるのが自分の中で、強みだと思っている」と意欲的だ。関東大会で収穫と課題を得たエースは「自分たちは力がない。目の前の試合に、一丸となって頑張ります」と夏に向けて再スタートを誓った。1年生の新戦力としては左腕・津島悠翔が関東大会でベンチ入り。センバツでは2試合に救援し、関東大会でも帝京との2回戦で救援した3年生右腕・中田有飛とともに、成長が期待される。気温が高く、消耗度の高い夏を勝ち抜くためにはエースに続く投手が不可欠となる。

左の大砲・岳原陵河、1年時から四番に君臨した右のスラッガー・高橋を擁し、小技に優れる中堅手・星野泰輝、一塁手・大森燦、勝負強い打撃が売りの捕手・佐仲大輝ら甲子園メンバーが並ぶ打線は迫力満点。関東大会でも2試合14イニングで20得点を奪うなど破壊力は健在だ。吉田監督、長男・吉田健人部長が行う相手校分析から導か

過去の夏の選手権連覇校

年度	学校名(地区)
1962	作新学院(栃木)
1966	中京商(愛知)
1979	箕島(和歌山)
1987	PL学園(大阪)
1998	横浜(神奈川県)
2010	興南(沖縄)
2012	大阪桐蔭(大阪)
2018	大阪桐蔭(大阪)

→四番・高橋もエース・林とともに高校日本代表候補に名を連ねた。勝負強い打撃は健在である



## 「目の前の試合に、一丸となって頑張ります」(林謙吾)

れる攻略法を忠実に実行できる野球脳の高さも攻撃力の源だ。春の頂点に立った甲府工、好投手を擁する甲府城西、駿台甲府、地力のある日本航空、東海大甲府など県内の実力校が王者撃破を狙う。林の負担を軽減できれば、夏も山梨、そして全国の頂点に立つ可能性は十分にある。

### SCHOOL DATA

正式名称	山梨学院高等学校
学校創立	1956(昭和31)年
野球部創部	1957(昭和32)年
野球部長	吉田健人
監督	吉田洸二
主将	進藤天
2022年秋結果	山梨県大会優勝、関東大会優勝、明治神宮大会1回戦
2023年春結果	センバツ優勝、山梨県大会準優勝、関東大会2回戦
過去3年間の夏戦績	22年=優勝(甲子園1回戦)、21年=4強、20年=準優勝
甲子園通算成績	春6回(優勝=2023年)夏10回

※20年は独自大会